

斜面環境 山の辺の道「13」
構造線と古道

なかむら さぶろう
中村 三郎

防衛大学校名誉教授
地すべり学会顧問
(理学博士)



1. はしがき

日本列島中央部を南北に横断する大構造帯はE.Naumannⁱによってフォッサマグナと命名された。列島の基盤構造を切断し生じた大地溝帯で、新第三系と第四紀の火山岩類も広く分布する(村井1981)。当地溝帯のほぼ中間の構造湖である諏訪湖の南、南アルプスと伊那山地との間に中央構造線が位置する。この構造線は南の豊川～三河～紀伊半島～四国北縁～九州にかけて約1,000kmほどの構造線が発達している。構造線沿いには各地に断層が発達し、時には地すべり性の崩壊等もみとめられる。

古来人々は山間に居住し生活を展開してきた。山地を背後に控えた住処は、人々にとって落ち着きや安らぎが得られる格好の場であった。長い間に、居住する人々の往き来する「山の辺の道」ができ、訪れる人々にとっても大切な行動の場となっている。

断層沿いにつくられた古道の名称には、人々の生活や生きざまと関わり深い古道名がみとめられる。例えば「塩の道」・「戦いの道」・「中馬道」などと呼ばれ、古人の長い歴史とその往き来が推測され、今日もなお、その流れと風情を感じることができる(図-1)。

フォッサマグナ地域の間には「塩尻」が位置する。古来より生活にとって「塩」は不可欠の品で、各種の漬け物や味噌作り、

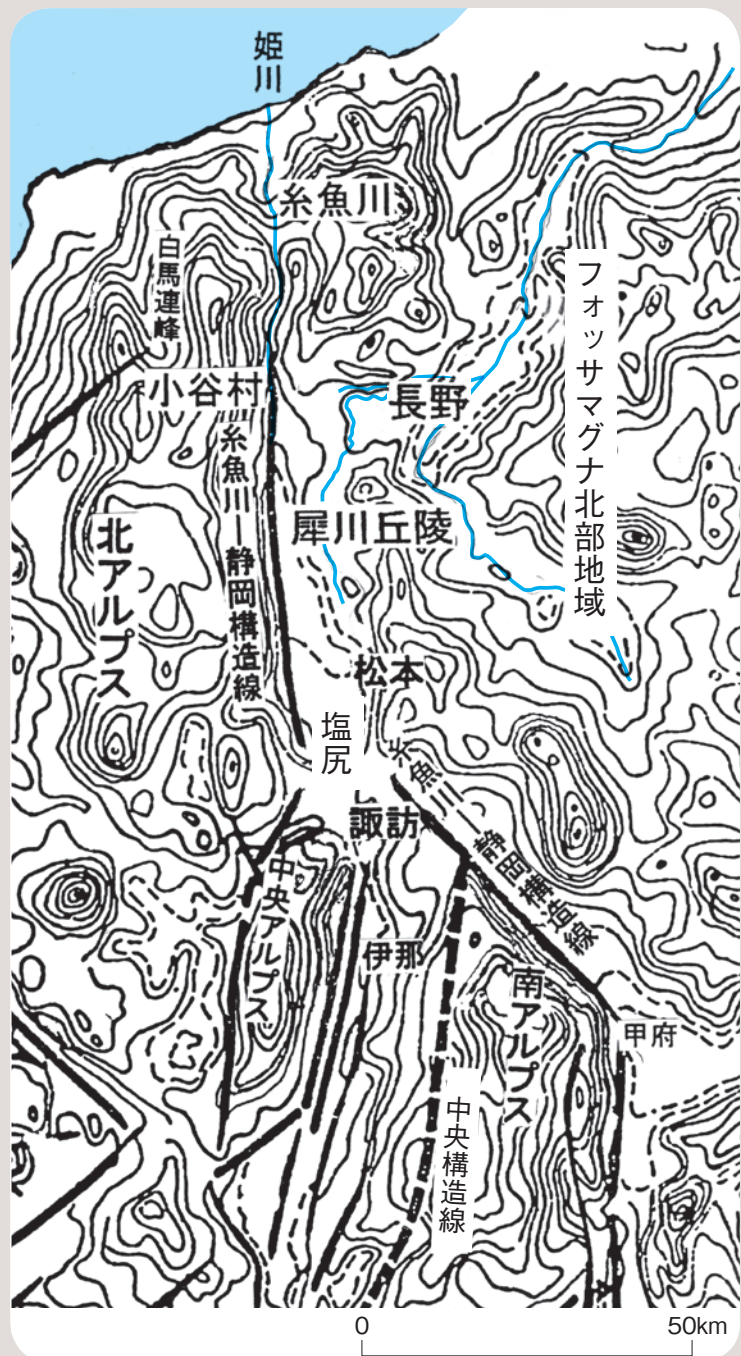


図-1 フォッサマグナ北部・中央構造線等の位置図(2012)

ⁱ Heinrich Edmund Naumann : (1854年9月11日～1927年2月1日)は、ドイツの地質学者。いわゆるお雇い外国人の一人で、日本における近代地質学の基礎を築くとともに、日本初の本格的な地質図を作成。またフォッサマグナを発見したことや、ナウマンゾウに名を残すことで知られる。

また牛馬の飼育にとっても必須であった。この大切な塩は、海水の直煮によって作り出されており、例えば日本海側で生産されて千国街道沿いに移送された塩は「北塩」と呼ばれ、糸魚川から松本を経て塩尻へと運ばれた。一方太平洋側で生産された塩は、三州街道・中山道沿いに移送され「南塩」と呼ばれ、この南北からの塩の到達する終点を「塩尻」と呼んでいた。

塩尻の東には塩尻峠が位置する。ここはフォッサマグナ沿いの山の辺道にとって大切な通過点であり、峠道で

あった。かつて信州へ行幸された明治天皇が、この峠での景観と風情を絶賛されたという。峠で眺望する諏訪湖とその周縁の蓼科・八ヶ岳の連山、遙か彼方に望み得る富士山の雄姿は見事で、絶景である。今日この峠には「明治天皇御野立所」の碑が建立され、訪れる人も多い(図-2)。

2. 漬菜の色

構造湖 諏訪湖岸の南西(岡谷)から南東(茅野)にかけて急傾斜の地形斜面が続く。これはいわばフォッサマグナ由来の断層崖である。この断層崖上部に杖突峠が位置している。峠への道は、諏訪大社上社前の東の坂道を登る。断層崖のためカーブの多い急斜面となる。急な坂を登り切り峠直前の展望台に着く、ここからは諏訪盆地と、遙か彼方に八ヶ岳の山々の広大な山裾を俯瞰し得て見事である。展望台を経て峠へ到達する。

杖突峠を通る古道は「秋葉街道」(国道152号線)であり、日本列島最大の中央構造線沿いの「山の辺の道」でもある。かつて私が信州を離れていた当時、折々の帰省にはこの峠道を経て高遠・伊那への道を通ったものである(図-3)。

峠から藤沢川沿いの二つの古道を辿り、「御道垣外」で休み、昼食を摂った。食堂では先ず茶請けに漬物を出してくれたが、この漬物がよく漬かっていて美味しく、印象深く忘れられなかった。このような時、ふと

「信濃路に帰り来たりてうれしけれ、
黄に透りたる漬菜の色は」

(1926)

という島木赤彦ⁱⁱの歌のことを思い出していた。かつての私は、この漬物があれば何杯でも飯のおかわりをしていただたものである。

「御道垣外」は江戸時代に栄えた宿場街であったという。古い街道沿いには家並み等も残ってお

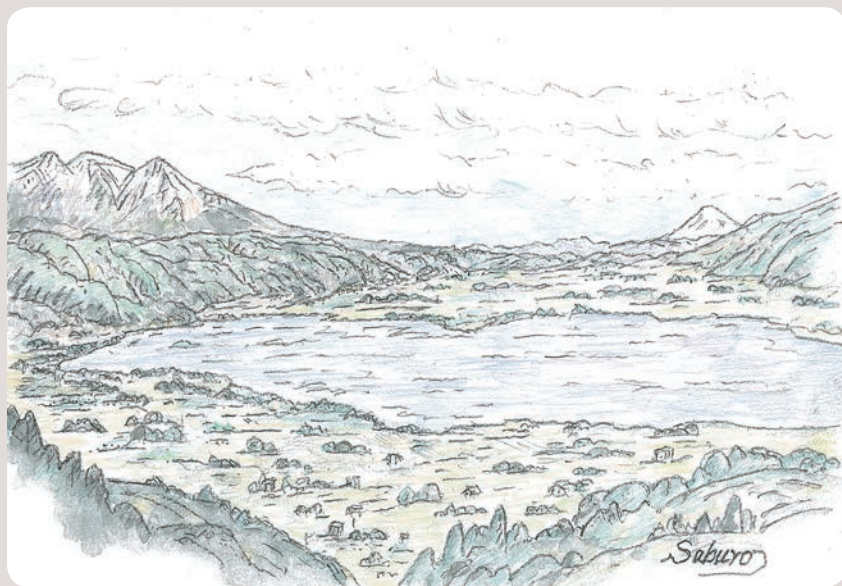


図-2 塩尻峠(御野立公園)から見た諏訪湖と周縁の景観(2019)



図-3 杖突街道と高遠町

ii 島木赤彦:(1876年(明治9年)12月16日~1926年(大正15年)3月27日)は、明治・大正時代のアララギ派歌人。長野県諏訪郡上諏訪村角間(現諏訪市元町)生まれ



写真-1 古い高遠町(高遠城址より)の風情

り、茅葺きの寄棟屋根・板葺きの石置屋根等の名残もあり、古道を辿り、村の風情に浸りつつ、故郷への想いをふくらませつつ、藤沢川沿い街道を南の高遠へと移動した。

3. 高遠城と「天下第一コヒガンザクラ」

藤沢川に沿ってさらに南へ移動すると、三峰川と合流する地域に高遠の町があり、両河川の合流域に出来た段丘の突端に高遠城址がある。約700年の歴史を持つという古い街で、いつ訪れても静かで居心地の良い街である。かつて作家 田山花袋ⁱⁱⁱは

「たかとほは山裾のまち古きまち

ゆきあふ子等のうつくしき町」(1916)

と詠っているが、高遠の街の風情と人々の気持ちがよく表現されている(写真-1)。

藤沢川・小室川等各河川の原面上では、縄文時代から平安時代にかけての住居址や遺物が発見されているという。このことは古代の信濃と大和政権を結ぶ「古東山道」の一地方の中心であったということも考えられる証でもあるという。

この高遠は平安時代末期以降、諏訪氏とその一族が長く支配していた。その後の天文14年(1545)に武田信玄との合戦に敗れ、7代200年にわたる諏訪氏の高遠支配の歴史は閉じられた。その後40年高遠は武田(勝



写真-2 ライトアップされた高遠城址のコヒガンザクラ

(提供：(一財)伊那市観光協会 HP)

頼・仁科五郎盛信^{iv})の居城であった。天正10年仁科五郎盛信は(1582)織田信忠の率いる5万の大軍との戦いの結果、高遠城は落城した。盛信の最期を物語るこの熾烈な戦況の話は、少年時代にしばしば聞いていた。

その後江戸の時代に入ると、高遠城は石高3,300石の政庁として保科氏、鳥居氏、1691年以降は内藤氏が明治時代に至るまで8代にわたり藩主を務め、高遠は伊那谷における教育・文化等の中心として重要な役割を果たしてきた。明治2年(1869)版籍奉還、明治4年の廃藩置県により高遠藩は廃藩となり、城は取り壊され城址となった。その後城址は明治8年(1875)に筑摩県^v所管の5公園の一つとして指定され、今日の高遠城址公園

iii 田山花袋：(1872年1月22日〈明治4年12月13日〉～1930年〈昭和5年〉5月13日)は、日本の小説家。『蒲団』『田舎教師』などの自然主義派の作品を発表し、その代表的な作家の一人。大正5年7月、高遠町を訪れている。

iv 仁科五郎盛信：甲斐国の戦国大名・武田信玄の五男として生まれる。勝頼は異母兄。信濃国安曇郡の国人領主である仁科氏を継承し、武田親族衆に列する。

v 筑摩県：1871年(明治4年)に飛騨国および信濃国中部、南部を管轄するために設置された県。現在の長野県中信地方・南信地方、岐阜県飛騨地方と中津川市の一部にあたる。

となった(図-4)。

かねてから上述の城址公園をはじめその周辺は見事な桜の名所で、古来「天下第一」と指摘され、全国でも屈指の名桜の場として知られている(写真-2)。公園化された当時、荒れたままとっていた高速城址を見た旧藩士達が、馬場の桜を城址へ移植したことが今日の



図-4 伊那市高遠町略図

名桜のきっかけとなったとも伝えられている。今では高速城址約1,500本、花の丘公園の2,000本をはじめ、周縁の「タカトオヒガンザクラ」が毎年咲き誇っており、昔も今も訪れる人々が絶えない。

4. 三峰川の流れと「あばれ天竜」

遠くがよく見えるから「高遠」という地名の由来だと聞いたことがある。確かに高遠やその街の外れから東西を望むと、はるか東方に南アルプスの仙丈ヶ岳、西方に中央アルプス山塊を眺望することが出来る。伊那節に「東仙丈、西駒ヶ岳、間を流れる天竜川、…」という一節が謡われているように、この景観は素晴らしく、訪れる人々にとって貴重なフィールドミュージアムの場ともなっている(図-5)。

ところがこの天竜川はかつて「あばれ天竜」の異名を以て知られており、しかもその元凶が「三峰川」であったと知って驚いた。この三峰川は南アルプスの大小の河流を集めて流下し、高遠を扇頂部とする大規模な扇状地をつくりつつ天竜川に合流し、その氾濫の元凶となっていた。

この三峰川について、上伊那誌(1963)の記録によれば、万治元年(1658)以来明治元年(1865)までの約210年の間に15回もの大洪水・大満水が記録されている。また明治2年(1869)以降昭和32年(1957)の間には24回もの大洪水(満水)が記録されている。このような頻度はげしい洪水や満水に、地域の人々の災害対応はたいへんなことであったと、年長の方々の話を聞いていた。昭和32年(1957)、当時の建設省、長野県、地元の人々の協力により、高遠町南東の美和地区三峰川流域に「美和ダム」が構築された。それ

以来三峰川の流れが安定したことにより、「あばれ天竜」のイメージは消え、今日に至っている(図-6)。

三峰川扇状地面の各所には、「島」とか「新田」という名の集落名が多く見られる。これはかつて三峰川の氾濫により、奔流によって運ばれた砂・礫が堆積したいわゆる「砂堆域」が形成され、その後そこに集落が出来、その集落名の末尾に「島」「新田」等の名がつけられたいわば土地の「性格」や「由来」を示す名称とも考えられ興味深い。

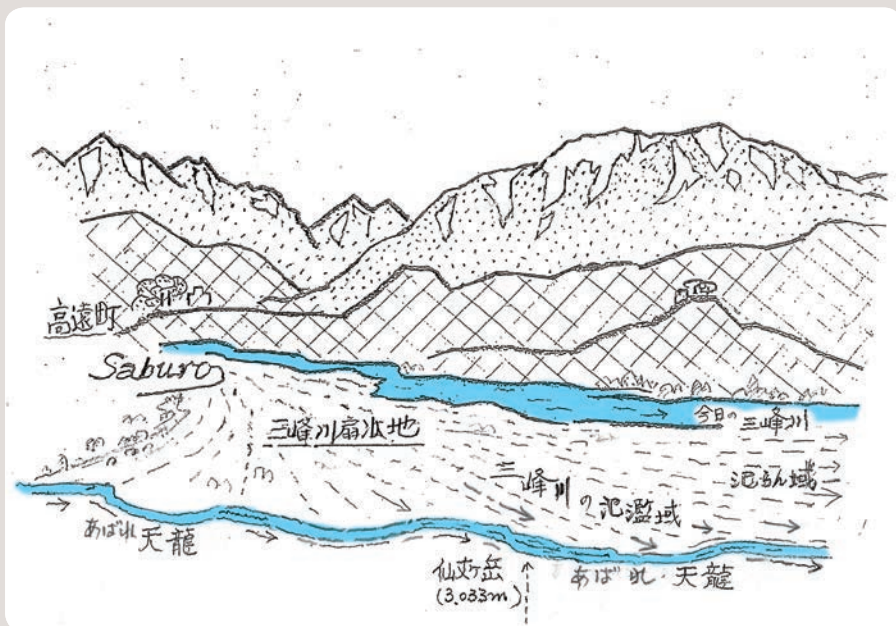


図-5 南アルプスと三峰川扇状地・あばれ天竜

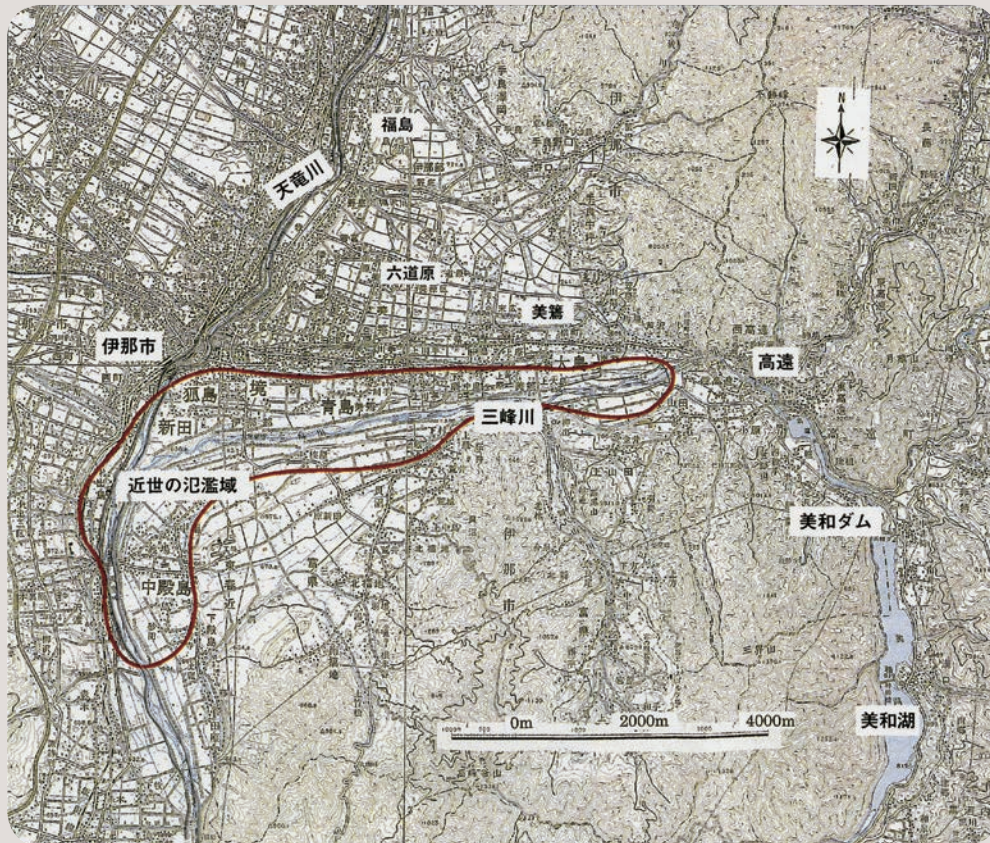


図-6 三峰川扇状地と天竜川・美和ダム

5. 中央構造線と大西山崩壊

秋葉道は南アルプス（赤石山脈）と伊那山脈との間の谷筋の街道であり、この谷筋は中央構造線谷の一部である。この構造線は関東地方から南信州・紀伊半島北部、四国北部、中九州に至る約1,000kmの構造線で西南日本を内帯と外帯に分けている。構造線沿いには各所に古来の山里が見られるが、各山里のすべての由来は追跡し得ない。

中央構造線の東側（外帯）部分は三波川帯・秩父帯・四万十帯が、西側（内帯）には領家帯の圧砕岩が帯状に分布している。構造線は領家帯と三波川帯との接触部分が主で、幅約数mの断層粘土の部分と数十から200mの破碎帯の発達と考えられている。造構造運動に伴う岩盤の破碎や起伏の大きな地塊域は斜面を不安定化し、構造線沿いの三峰川・小渋川・遠山川の流域には190箇所を超える大小規模の地すべり性崩壊が発生している。このうち約1/2は三波川帯に発生している（図-7、図-8）。

大西山崩壊

昭和36年（1961）6月29日朝9時、累積雨量533.2mmの集中豪雨により、平穏な伊那盆地は未曾有の地盤災害に襲われた。地域で「三六災害」と呼ばれるこの災害は、中央構造線（秋葉街道）沿いに位置する大鹿村大河原の大西山で、突然大規模な「山抜け」（土石流）

が発生したものである。大西山（1,741m）における構造線上の三角末端面の厚い岩帯部分が、高さ450m、幅500m、厚さ15mにわたって大音響とともに、屏風が倒れるがごとく転倒、崩壊して、大規模な山津波となったのであった。山津波は小渋川の堤防等を吹き飛ばし、700m離れた対岸の文満集落までわずか1分足らずの速さで到達し、一挙に家屋等を呑み込み、逃げる人々を助ける暇もなかったという。崩壊土量は330万 m^3 、42名の犠牲者が記録されている（天竜川上流河川事務所（1983））（図-9、写真-3）。

半世紀前のこの大惨事は、地域にとっては、忘れることの出来ない大きな悲しみと同時に貴重な教訓となって、その後の地域防災対策に生かされている。

「赤石 塩見 よく晴れて 空の青さが うつりくる
つばら瞳の かがやきよ 風のことばに 耳たてて
未来をわける 葦となれ」 （島崎和夫 1984）

という被災現地 大鹿小学校校歌の歌詞は、大河原を訪れる人々の心を捉える。振り返ると南アルプスの山々が里の安全を語りかけてくれているような気持ちになる。

参考引用文献

- 1) 中村三郎（2016）；フォッサマグナ北縁の里山異変と「稀有な天助」、『sabo』vol.120
- 2) 村井 勇（1981）；地形学辞典、二宮書店

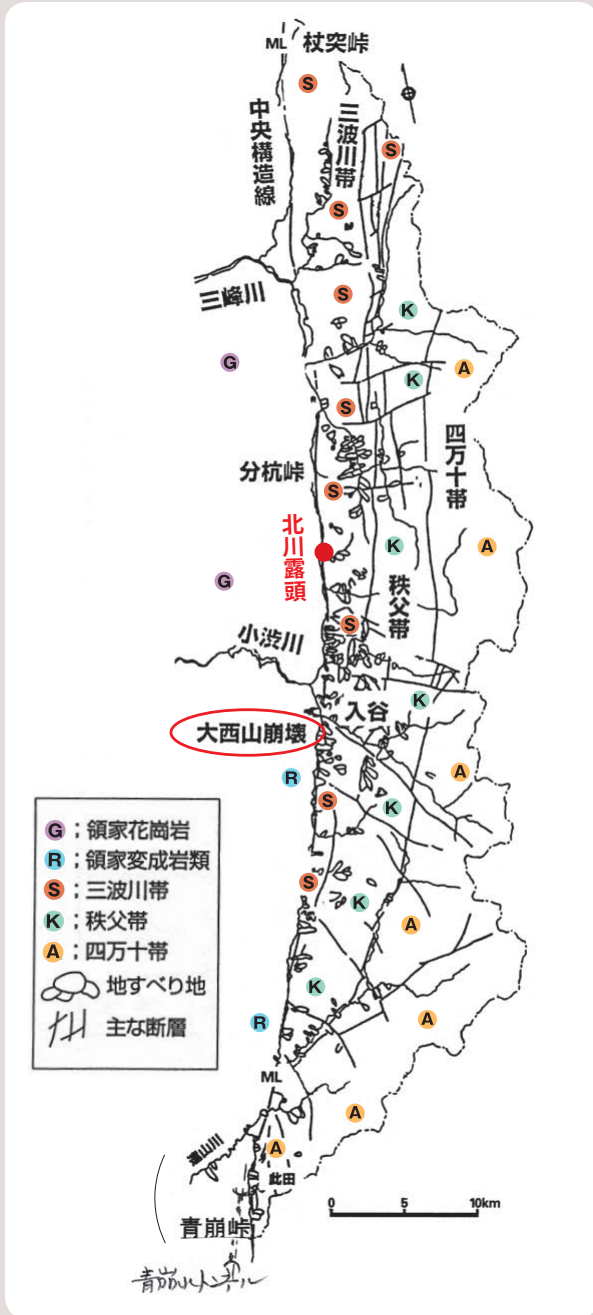


図-7 中央構造線と崩壊地分布(大西山崩壊位置、北川露頭位置)

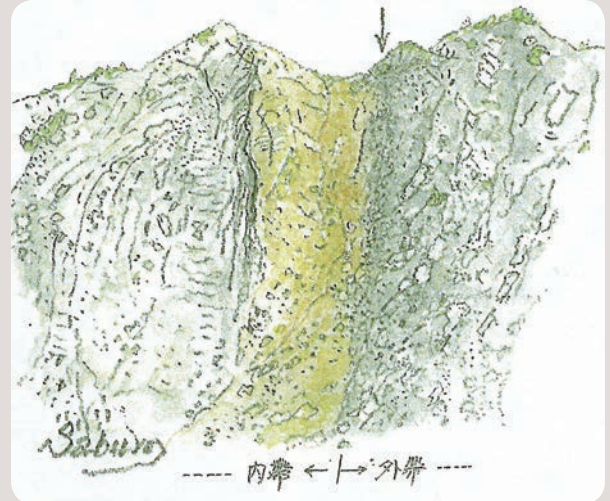


図-8 中央構造線北川露頭(図-7参照)

西南日本の内帯と外帯を分ける構造線部分です。断層の動きによって岩体は破碎され、もとの岩体との見かけは変わっている。図中↓印直下が断層線部分。赤褐色側が内帯側で熱いマグマが地下でゆっくり固まった花崗岩（領家帯）。右側の緑黒色の部分は外帯側で低音で高い圧力を受け鉱物が薄い板を重ねたごとく変化した結晶片岩類（三波川帯）である。



図-9 大鹿村大西山大崩壊と秋葉道(図-7参照)



写真-3 大西山大崩壊(1961・6・29三六災害)(国交省天上河川事務所(2012))

大河原西の御荷ぶ破碎帯部分において大規模に崩壊した山塊は、700m離れた村へ一分足らずで到達し、古今稀な未曾有の大災害となった。

- 3) 平林照雄 (1988) ; フォッサマグナー信州の地下を探る一、信濃毎日新聞社
- 4) 中村三郎・檜垣大助 (1991) ; 地すべり地形の生成と変化、地すべり学会シンポジウム論文集
- 5) 田村俊和 (1962) ; 全国的にみた大規模地形改変の実態、『地理』vol.7、No.9
- 6) 諏訪兼位 (2010) ; 科学を短歌に詠む、学士会報 885
- 7) 中村三郎 (2018) ; 中馬の道と景観街道、『sabo』vol.123
- 8) 中村三郎 (2011) ; 人と栖(すみか)、『sabo』vol.105
- 9) 長野県上伊那郡誌 (1963) ; 上伊那郡誌刊行会
- 10) 天竜川上流河川事務所委員会報告 (1985)